山梨県韮崎市

Maruyamahigashi Site

丸山東遺跡

大草地区畑総合開発事業に伴う緊急発掘調査報告書

2003

韮崎市教育委員会
峡北地域振興局

山梨県韮崎市

Maruyamahigashi Site

丸山東遺跡

大草地区畑総合開発事業に伴う緊急発掘調査報告書

2003

韮崎市教育委員会
峡北地域振興局

序　　文

韮崎市内では現在200遺跡を越す埋蔵文化財包蔵地が確認されています。丸山東遺跡もその一つであります。周辺ではこれまでに羽根前遺跡や大門遺跡などの発掘調査を実施してまいりましたが、今回の丸山東遺跡の所在する台地でははじめての調査となりました。道路幅という狭小な範囲でありますが、近世にまで遡りうる道跡などの発見は、羽根の丸山東地区に近世期の集落の存在を予想させるものでありますし、過去の分布調査では平安時代の遺物も発見されています。

当地域の歴史の紐解きに本書がお役に立つことを願い、今回の調査に甚大なるご理解とご協力をいただきました地元の皆様方へこの場を借りてお礼を申し上げる次第であります。

平成15年3月28日

韮崎市教育委員会

教育長　輿　石　　薫

例　　言

1　本書は、山梨県韮崎市大草町上条東割字丸山東に所在する丸山東遺跡の大草地区畑総合開発事業に伴う発掘調査報告書である。

2　試掘調査を平成13年度に、本発掘調査を平成14年５月から実施し、途中中断し、12月に終了した。その後、整理作業を実施し平成15年３月末日に事業を終了した。

3　本書の執筆・編集は閏間俊明がおこなった。

4　写真測量は株式会社シン技術コンサルに委託し実施した。

5　発掘調査ならびに報告書作成にあたり、多くの方々からご指導・ご協力・ご鞭撻を頂いた。厚くお礼を申し上げる次第である。

6　発掘調査・整理業務により出土並びに作成された遺物及び資料等は、韮崎市教育委員会が保管している。

調　査　組　織

1　調査主体　韮崎市教育委員会教育課生涯学習推進室

教育長　　輿石　薫
課　長　　新藤　稔
室　長　　長野栄太
リーダー　山下孝司（学術文化財係）
主　事　　閏間俊明（　　〃　　）
非常勤　　秋山圭子（　　〃　　）

2　調査担当　閏間俊明

3　調査参加者　阿部由美子・上野理江・漆原弘子・小野初美・川手祐子・土屋啓子・土橋イチコ・藤原和美

凡　　例

1　遺構・遺物の縮尺は各図に示したとおりである。

目　次

序　文
例　言
調査組織
凡　例
目　次

第１章　調査経過 …… 1

第２章　遺跡の環境 …… 1
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　遺構と遺物 …… 1
　第１節　遺構
　第２節　遺物

第４章　考　察 …… 8

第１章　調査経過

平成13年度に大草地区畑総合開発事業に伴い、韮崎市教育委員会へ埋蔵文化財有無確認調査依頼が峡北地域振興局農務部から提出された。教育委員会で有無確認調査を実施した結果、平安時代の遺物が出土し、埋蔵文化財包蔵地であることを確認し、その小字名から丸山東遺跡として登録をおこなった。その後、地元地権者、峡北地域振興局及び教育委員会で協議し、平成14年度に発掘調査を実施することとした。

発掘調査は平成14年５月９日～６月３日と11月19日～11月30日に実施し、平成15年３月まで整理業務をおこなった。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

丸山東遺跡は韮崎市内南西部の竜岡台地上に所在する。北側は比高差50ｍの断崖である。現在の甘利小学校との間には沢が走り、独立した丘陵を呈している。

丘陵は標高391ｍを最高に、東・西・南へ緩やかに傾斜する。現在、桃や葡萄などの栽培耕地として主に使われている。

調査地点は、丘陵の南斜面の中央部にあり、西に向って傾斜するところである。

第２節　歴史的環境

竜岡・大草町地域では古くから弥生時代以降の遺跡の存在が指摘されてきたが、羽根前遺跡では畑地から耕作中に後期の遺物が出土している。また、1999年度の韮崎市教育委員会による発掘調査では、縄文時代前期後半諸磯ｂ式・中期前半狢沢式～新道式・晩期後半氷式の土器などが出土している。また、1068年初鋳の北宋銭である「熙寧元宝」が出土しており、隣接する南宮神社及び集落の起こりを考えるうえで興味深い。

引き続き古墳時代の遺跡も確認されている。特に前期が多く大門遺跡、羽根前遺跡、長塚道上遺跡、長塚道下遺跡や下馬城遺跡などがある。

遺跡の所在する大草町上条東割について、文化年間に編纂された『甲斐国志』には以下のように紹介されている。

上条東割村　　羽根　堤　丸山　池ノ久保　宮ノ前
　一高五百五十三石二斗六合　　戸　七十二
　　口　二百五十一　男百二十四　　馬十二
　　女百二十七　　牛六
　当村ハ南宮神明ノ西ヨリ北ニ在リ東方ハ羽根ト
　云処ノ小坂ヲ下リ若尾新田ヘ通路アリ羽根坂
　ト名ヅク北ハ若尾村ナリ

72軒の家があり、251人をかかえる村で、５つの地域に分かれていたことが分かる

現在、上条東割の小字名には、神明前・中芝原・大石・築地・羽根前・堤久保・上ノ久保・丸山東・坂下がある（第３図）。『甲斐国志』に記載された地名とは異なり、旧地名の範囲の把握が困難な状況である。

第３章　遺構と遺物

第１節　遺構

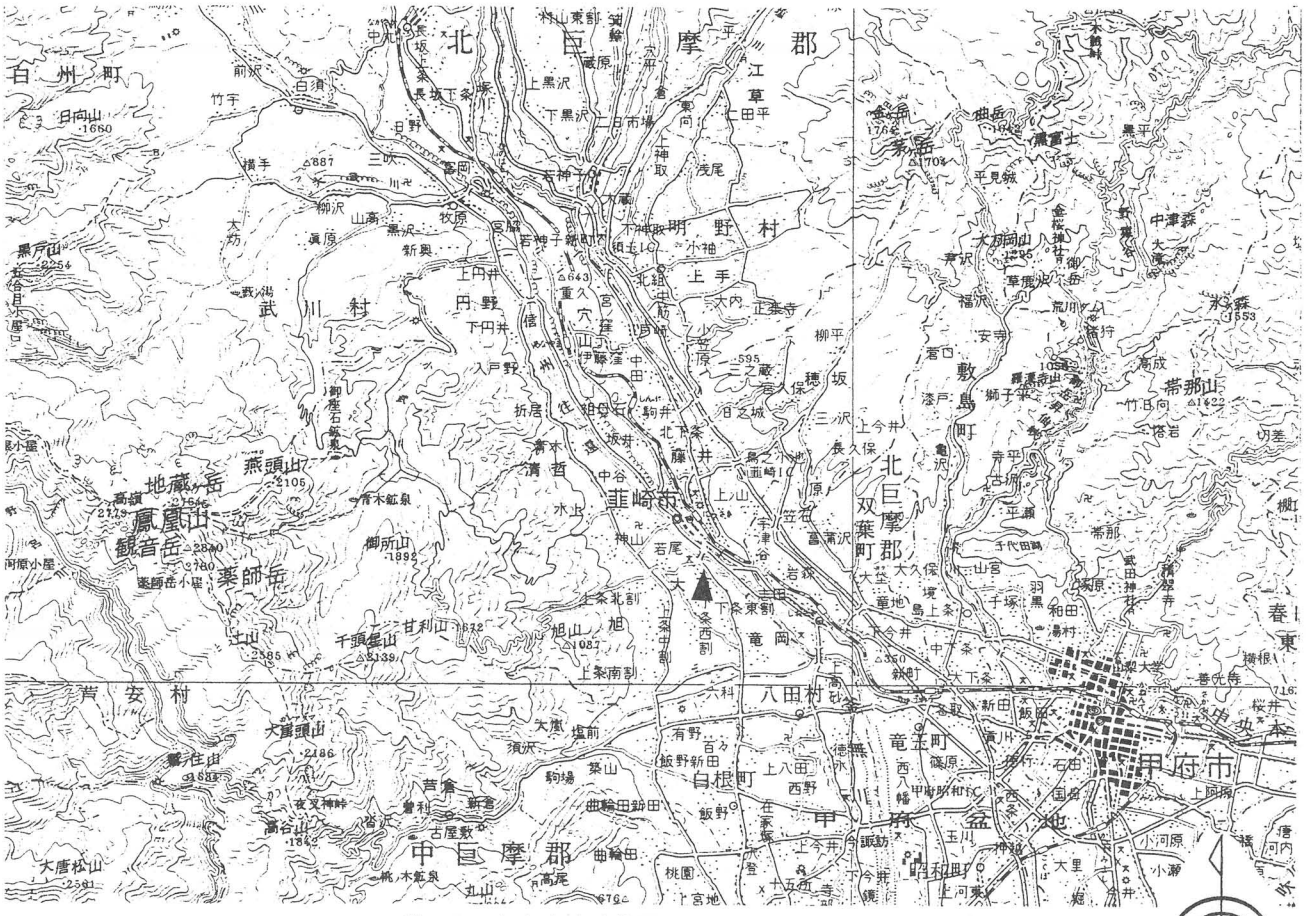
簡易アスファルト舗装された道路下から、側溝・ピット・竪穴状遺構を確認した。

側溝（第５・６図）

簡易アスファルト舗装を行う以前の旧道路に伴う側溝である。数条重複する部分も見られることから数回のメンテナンスが実施されたと捉えることができる。側溝で挟まれた部分には硬化面を捉えることはできなかった。

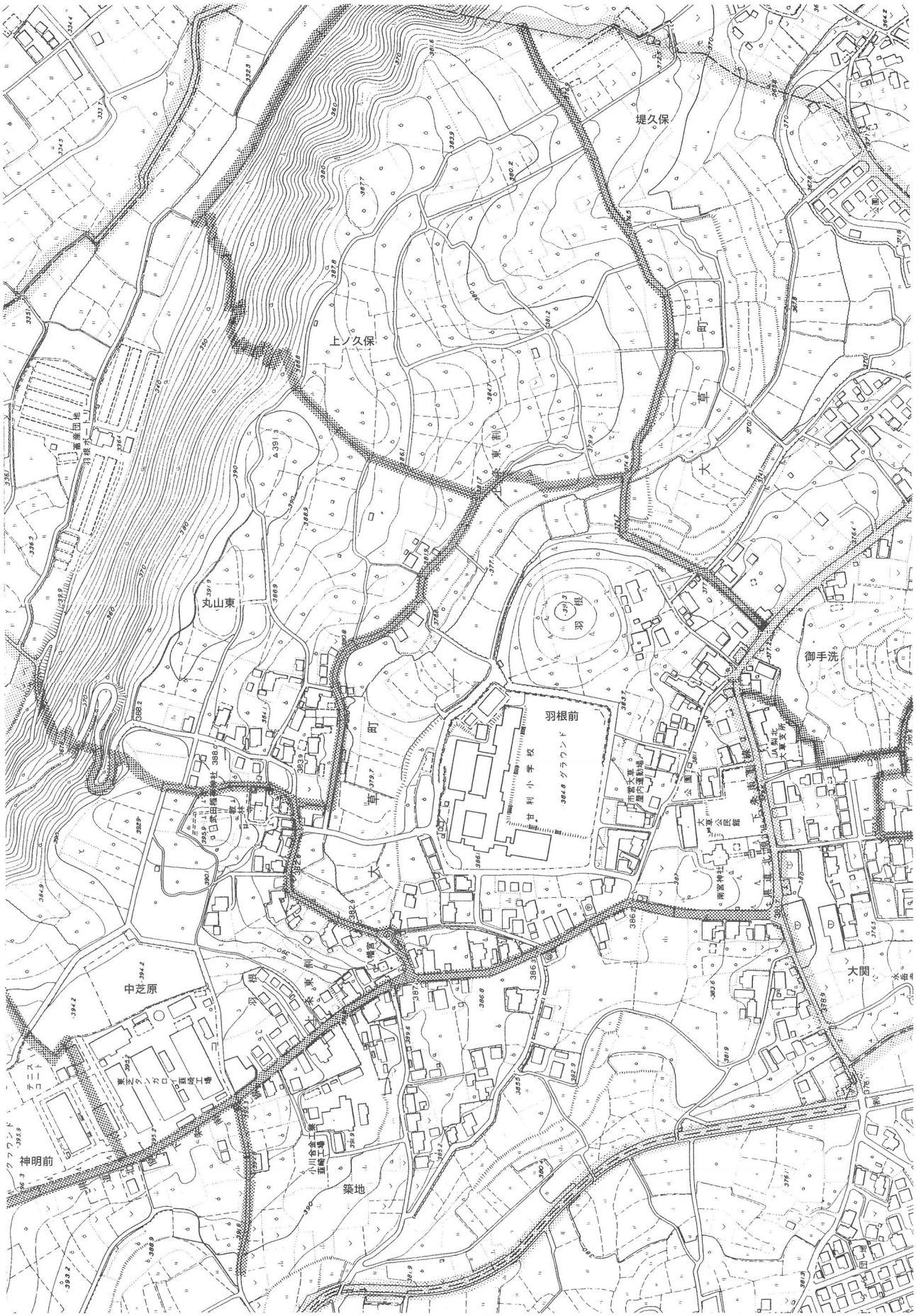
調査区東側においては、南側の側溝が深く掘削され、西（斜面下方）に向って側溝は浅くなり、一部不明瞭な部分も見られる。

溝覆土内出土の遺物に明治時代以降のものが含まれていることから、確認した側溝は明治時代以降で



第1図　丸山東遺跡位置図（S=1／200,000）

第2図　丸山東遺跡と周辺の遺跡（S=1／25,000）



第3図　丸山東遺跡周辺の地名（S＝1／5,000）

ある。ただし、近世（18世紀後半～19世紀初頭）の遺物が最も多く出土しており、側溝の遡源または周辺に一般的な生活道具を使用する場が近世にあったと推定される。

ピット（第５・６図）

側溝と重複するピットは、側溝掘削以降のものである。３列の組み合わせがあり、いずれも葡萄棚のためのピットである。

竪穴状遺構

調査区中央部の北側に、その一部を確認した。東西2.7m、深さ12cmである。遺物の出土はなく、掘り込み面も耕作土により不明確である。

第２節 遺物（第７図）

縄文時代前期後半の諸磯式、弥生～古墳時代の赤彩土器、近世(生産地年代で18世紀後半～19世紀初頭)の陶磁器・土器や明治時代以降の陶磁器・土器などが出土している。出土量の多いのは、近世である。

１～３・６は筒形の染付け湯呑み碗で18世紀後半から1810年代の所産である。６は見込みにコンニャク印判による五弁花文がある。４・５は「くらわんか碗」と一般的に呼ばれている雑器である。18世紀前半から中葉の所産である。７は矢羽文のある水滴。８は陶製の仏飯器の脚部と考えられる。

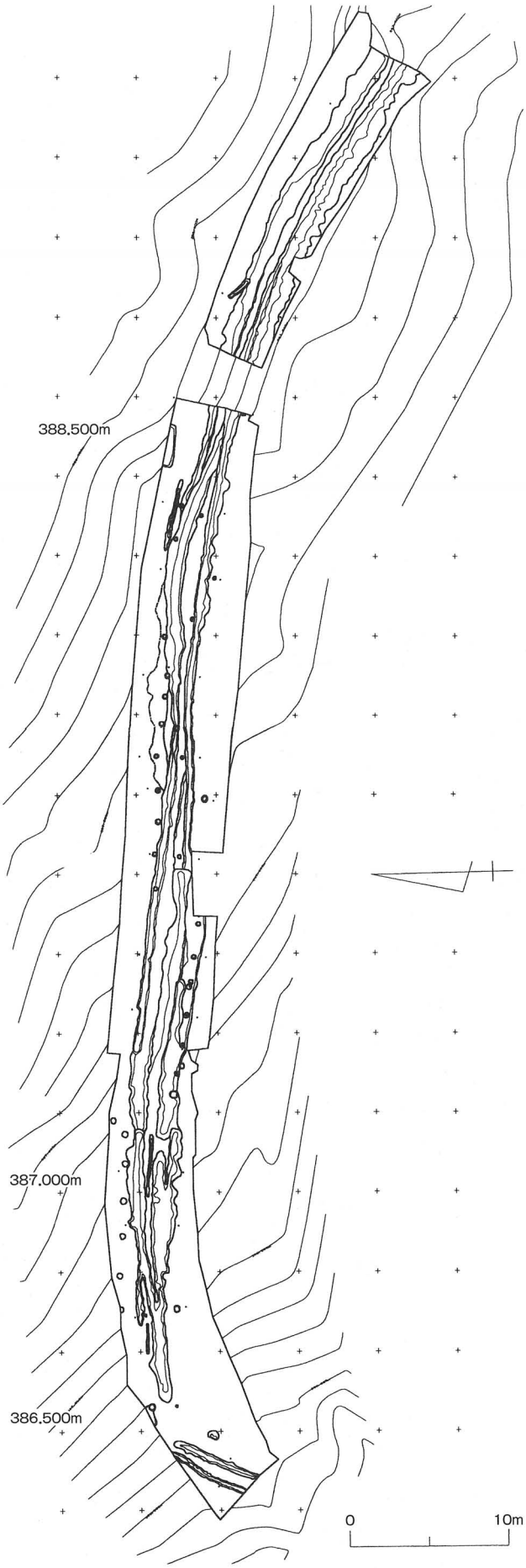
９はガラス製の薬瓶である。別々に胴部と頸部以上が作られ溶接されたものである。

10～12は内耳土器の口縁部である。

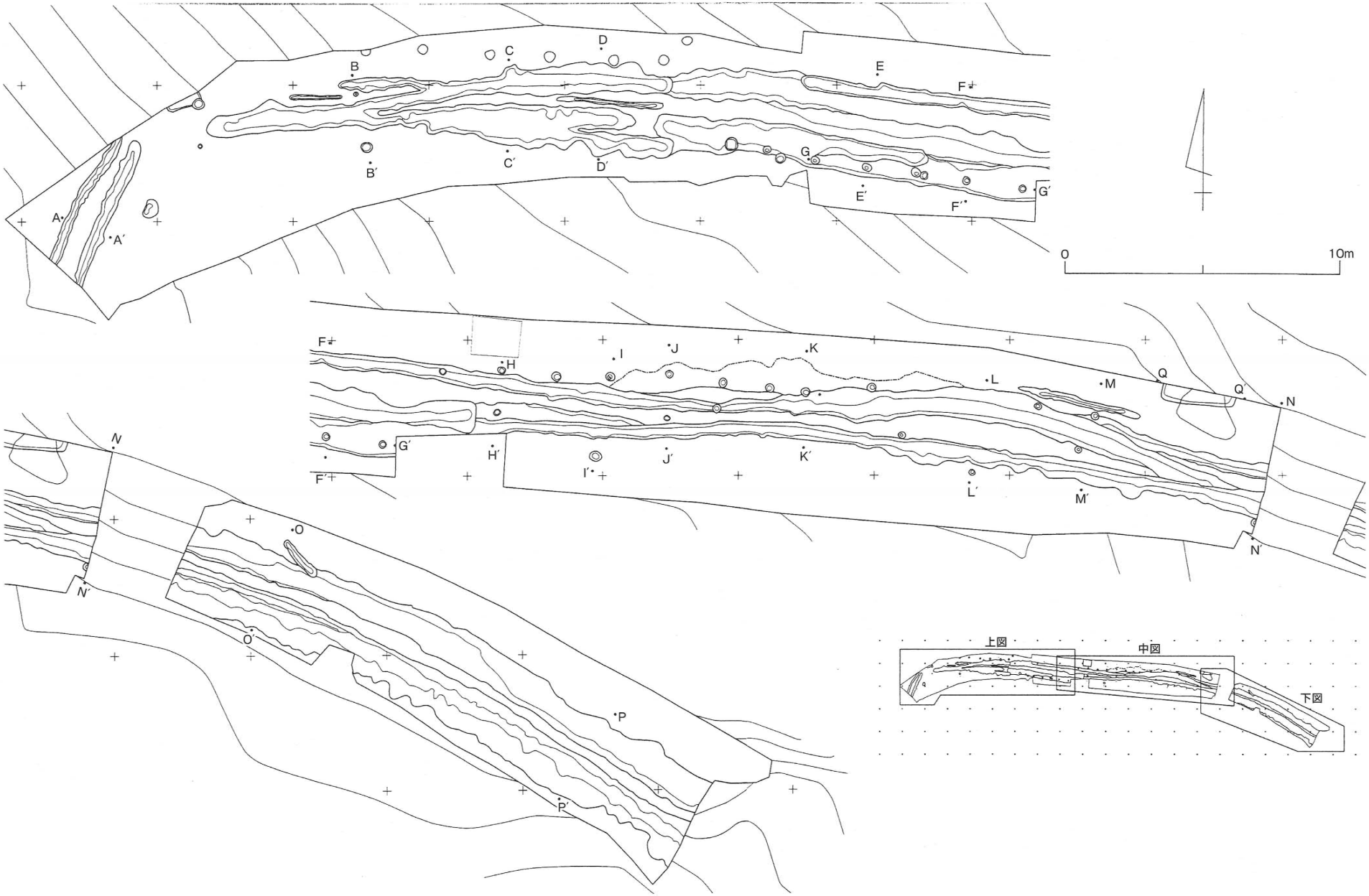
13・14は寛永通宝である。

15は内面が丁寧に摩滅した臼状の石器である。

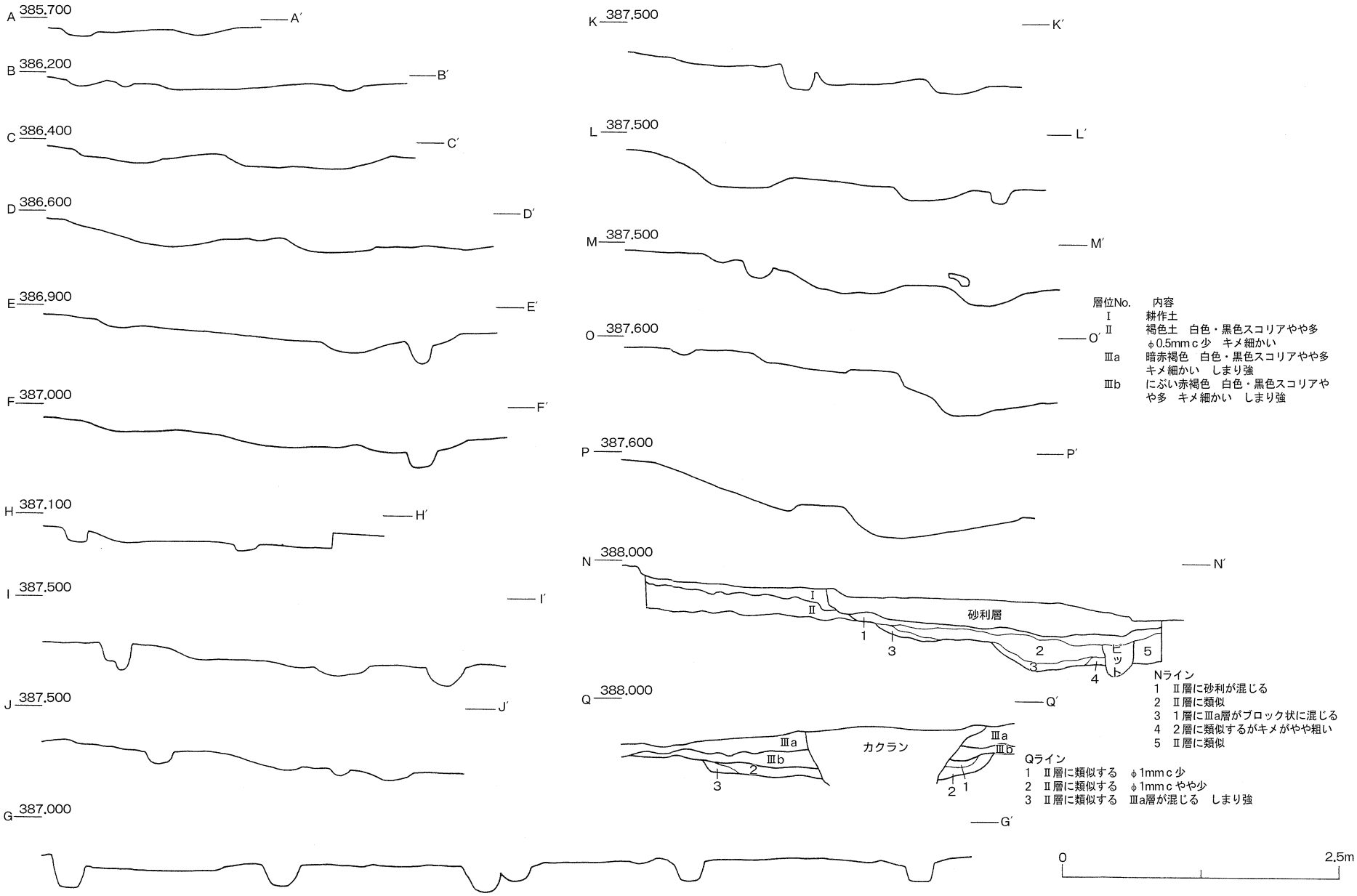
近世の磁器はいずれも肥前産であり、産地で波佐見窯などをはじめとして大量生産がおこなわれ始めた時期と重なる。



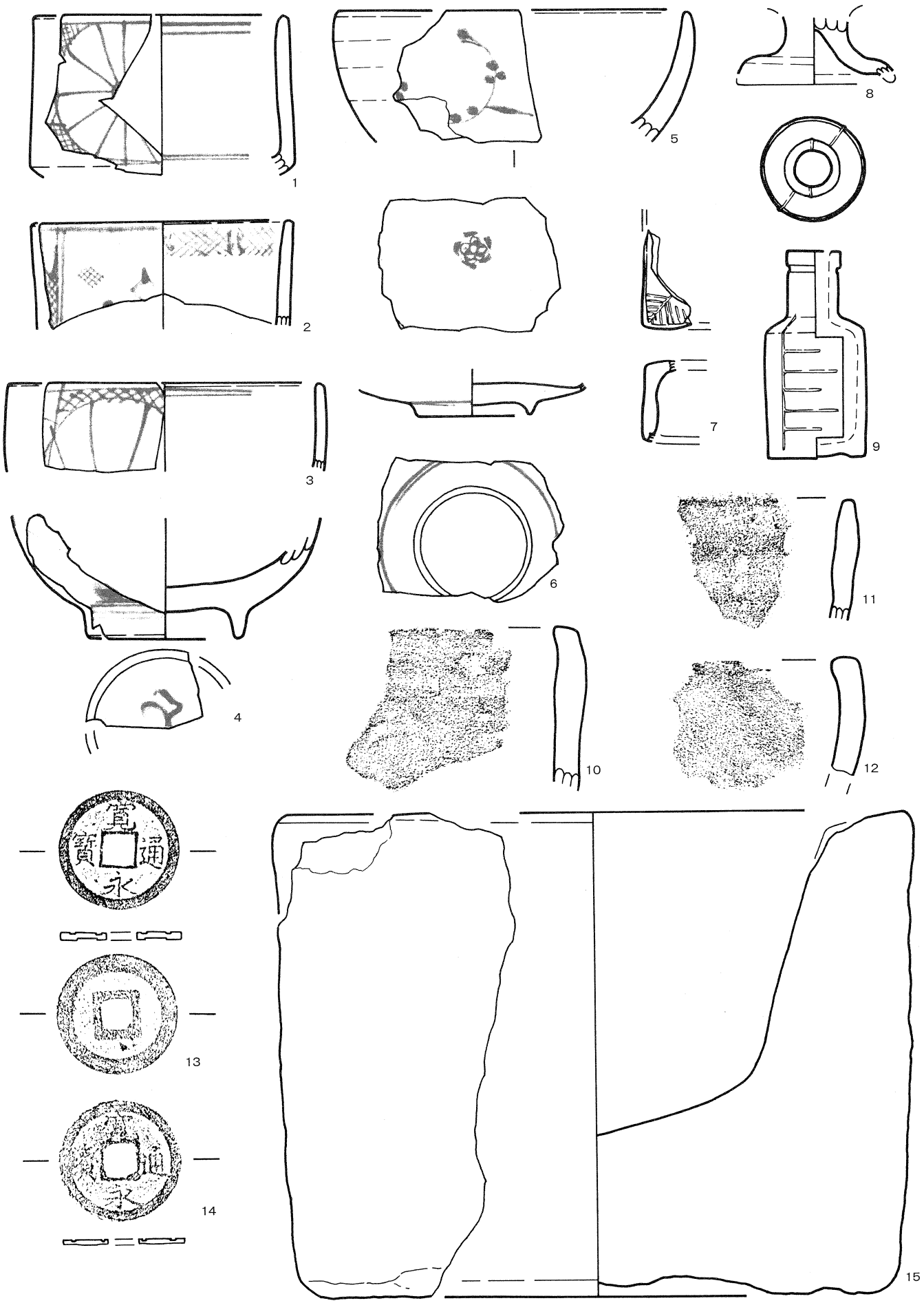
第4図　丸山東遺跡遺構全体図（S＝1／400）



第5図　溝・ピット群・竪穴状遺構平面図（S=1／200）



第6図　溝・ピット群・竪穴状遺構断面図（S=1／50）



第7図　出土遺物（1～12：S=2／3，13,14：S=1／1，15：S=1／4）

第4章　考　　察

山梨県内の道跡調査

はじめに

近年、道に対する歴史的認識は高まりつつある。これまでの海上・水上交通については議論が活発であったが、陸運については取上げられることが少なかったといえる。このような現状に対し、「人や物、そして文化までが行き交った交通ルートが、海上・水上に限られるものでないことはいうまでもなく、これらの関係を有機的に捉え直す必要」(1)や「物流と同時に人の往来すなわち交通の問題も視野に入れなければならない」(2)などの提言がなされ、古代交通史研究会や中世のみち研究会などのシンポジウムが開催されている。

山梨県内のこれまでの発掘調査事例を紹介し、道跡周辺の景観復元を可能な範囲で示し、丸山東遺跡の道跡について考察する手がかりを提示する。

1　発掘調査事例の検討

山梨県内では新田遺跡、西畑遺跡や石橋北屋敷遺跡などで道跡の報告がされている。その代表的な遺跡の調査成果について以下に説明する。

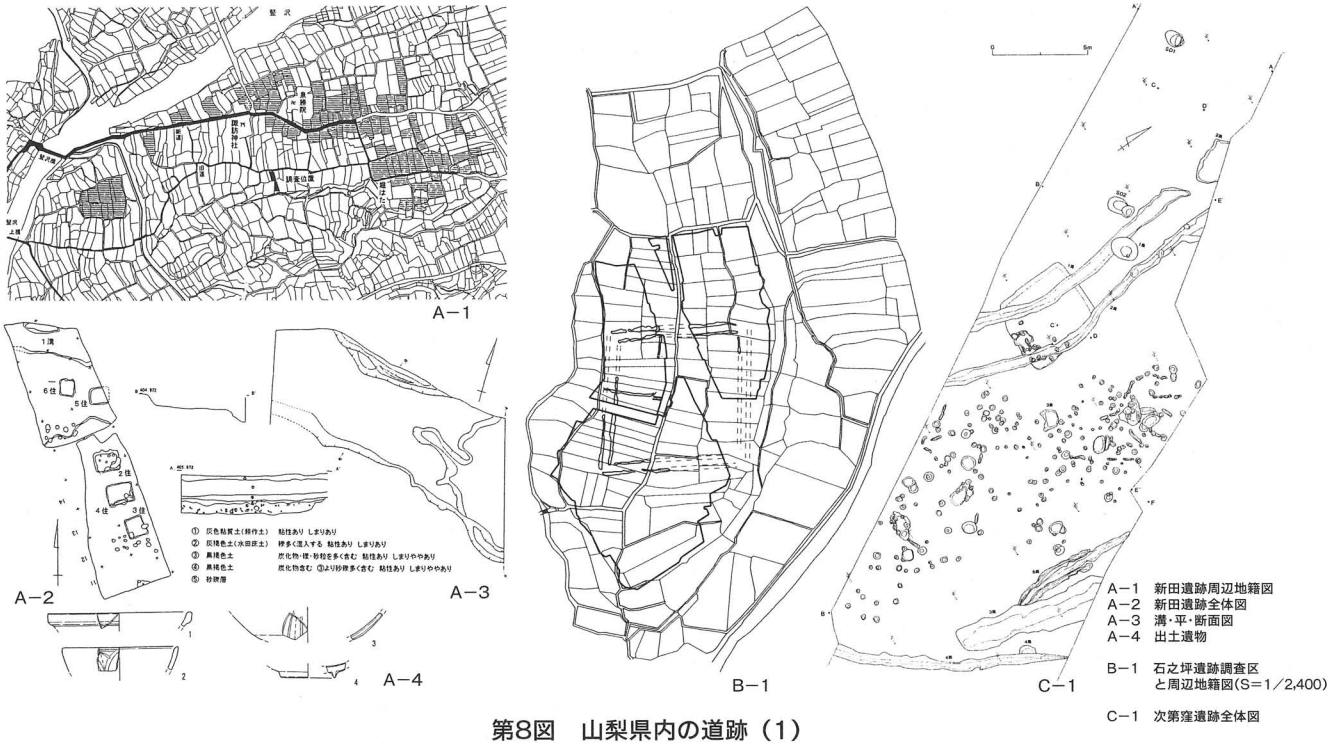
新田遺跡（韮崎市）　釜無川の右岸標高400m前後の緩やかに傾斜する河岸段丘上の東に位置し、縄文時代中期、平安時代、中世及び近世の遺跡である。

現在も使用されている道の南側に幅２m前後の溝が平行に走る。道路の通路部分は未調査であることから状況は不明である。溝覆土から13世紀代の青・白磁が出土している。溝が道に伴うものとすれば、現在の道の起源が13世紀まで遡るものと考えられる(3・4)。

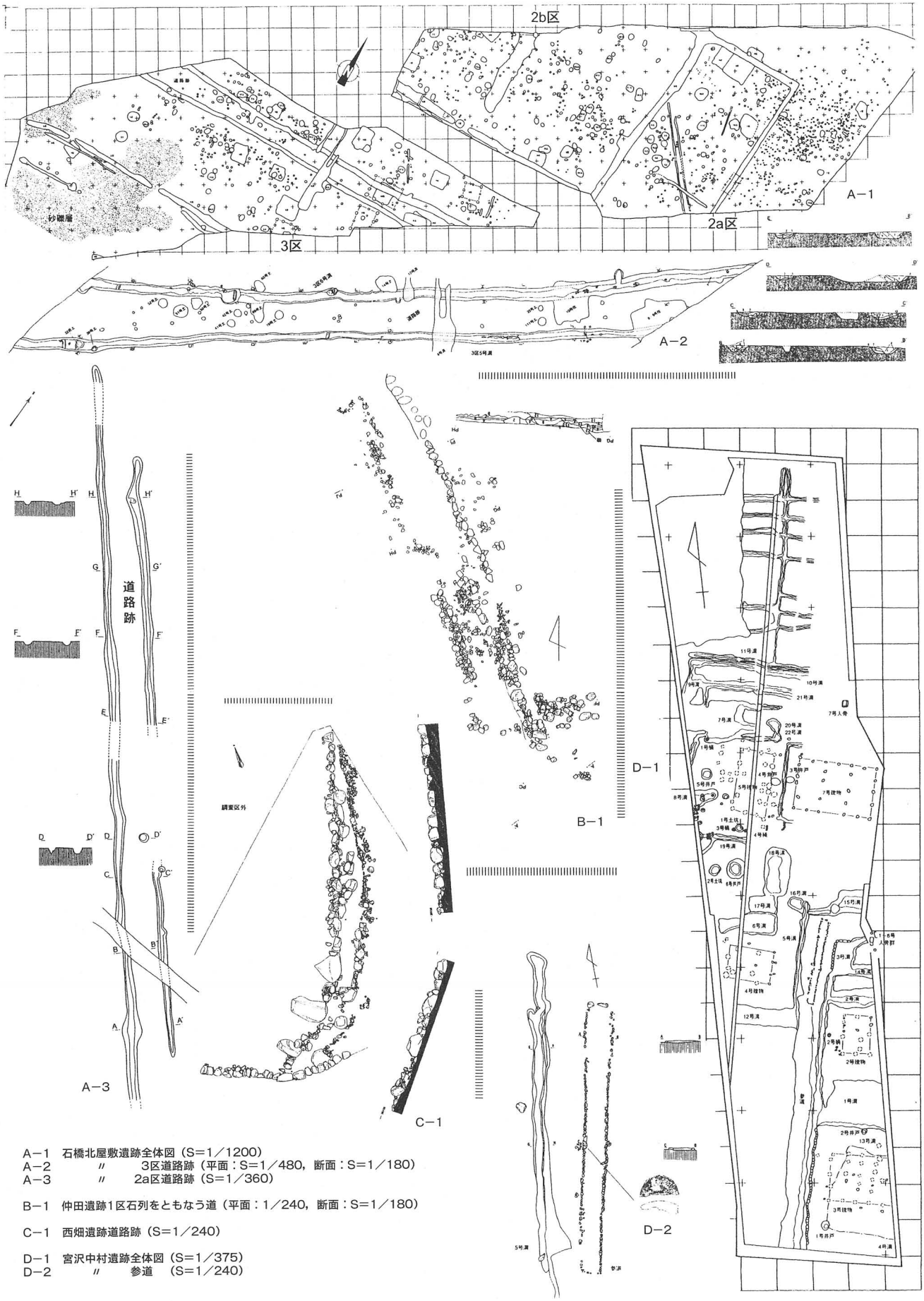
石之坪遺跡（韮崎市）　釜無川右岸の標高約460mの河岸段丘上に占地する。縄文時代、平安時代の集落跡や中世以降の一辺約90mの方形区画溝などが確認されている(5)。

調査区北側の方形区画の地割から延びる幅５m、断面丸底の２条の溝（以下、旧道とする）が調査され、現在使用されている舗装道路（以下、現道とする）と平行している。

現道沿いには東西方向に長い短冊形の地割が並び、宿場町の形態を成している。また、現在の上円井集落が元来この地に占地していたという伝承がある。このことから、近世段階に甲州街道の整備と供に現在の集落へと移行した可能性が高い(6)。集落の移動と供に道の機能も変化し、集落内のメインルートから耕作地内の移動ルートとなったといえる。



第8図　山梨県内の道跡（1）



A−1　石橋北屋敷遺跡全体図（S=1／1200）
A−2　〃　3区道路跡（平面：S=1／480，断面：S=1／180）
A−3　〃　2a区道路跡（S=1／360）

B−1　仲田遺跡1区石列をともなう道（平面：1／240，断面：S=1／180）

C−1　西畑遺跡道路跡（S=1／240）

D−1　宮沢中村遺跡全体図（S=1／375）
D−2　〃　参道　（S=1／240）

第9図　山梨県内の道跡（2）

旧道は遺構の重複や覆土の状況から平安時代以降のものと考えられる。

次第窪遺跡（韮崎市）　八ヶ岳から延びる七里岩上の西端崖線付近に位置し、標高は525mをはかる。２本の道跡を確認している。一つは平安時代後期から中世と考えられるものである。等高線に沿ってほぼ南北に軸を持ち、幅約60cmの２条の溝（１・２号溝）に挟まれている。溝の深さは約30cmであり、覆土には礫がやや多く含まれていた。この道跡を境にして、斜面下方に当たる南側に中世段階の可能性があるピット群が確認されている。もう一方も同じく等高線に沿って、溝が１条（４号溝）あり、地籍図上の道と重複する。少なくとも明治期までは存在していた道であるが、その起源について示す資料は検出されていない。

石橋北屋敷遺跡（八田村）　御勅使川扇状地の扇央から扇端部の標高330mに占地する。古代、中世及び近世を主体とする遺跡である。現在流れる御勅使川流路は中世末頃からのものであり、旧流路は遺跡の南を走っていたことが確認されている。

確認された道跡は２条である。一つは、13世紀代と推定される幅0.2～0.5mの溝を両脇に持つ幅１m前後のものである（２区道路跡）。溝の断面は丸底である。

14～15世紀代に比定される幅0.6～1.5mの溝を両脇に持つ幅3.3～5.6mのものである（３区道路跡）。溝の断面は、箱堀状と丸底の部分があり、統一されていない。規模から「公的な道」と位置付けられている。また、道跡に平行して区画溝が見られるが、陶磁器等の当該期の遺物出土量の少なさから屋敷自体ではなく、それに付随する施設として捉えられている(7)。しかし、時期判断はできないがピット群の存在が確認されており、長期的ではないにせよ、屋敷の存在した可能性も考えられよう。

道跡の西延長上には大塚遺跡(8)や野牛島・大塚遺跡(9)があり、古代から中世段階の遺構等が確認され、南東方向には野牛島集落が存在する。安易な推定は控えるべきであるが、これらと有益な関係をもつ道跡と捉えておきたい。

仲田遺跡（八田村）　御勅使川扇状地と小扇状地に地形的区分される付近の標高320mに位置する。16世紀後半頃の水田跡と道跡が確認されている。

道跡は南北方向に作られたもので、両脇は石列により区画されている。東西に囲まれた石列間は約1.8mで、小砂利が突き固められたような非常に硬い状態で確認されている。

この道跡は、16世紀後半頃の水田と確認面が同一である。また、遺跡周辺に永禄四年開基とされる諏訪神社の跡地を示す碑が存在し、遺跡北側の「赤山」に鳥居が存在していたことが伝えられている。このようなことから、本道跡は16世紀後半頃に、主に参道として使用されていたと位置付けられている(11)。

西畑遺跡（塩山市）　重川右岸の小山状の台地上に占地する。北に黒川金山衆の一員であった保坂家の屋敷地がある。

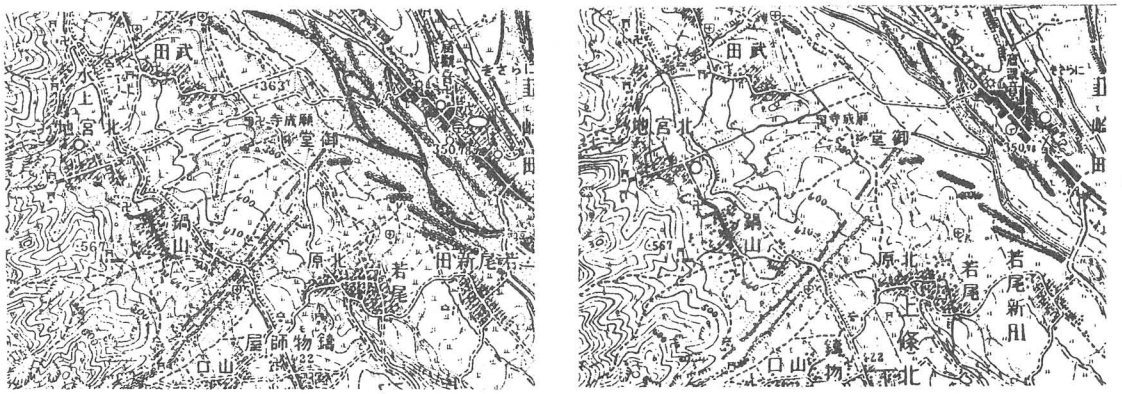
幅0.8m前後で、石列等の状況から西側に３段程度の石積みがされていたと考えられる。この石積みは地形との絡みから土留めとして用いられたものと、推定されている(10)。近世から近代の陶磁器が出土しており、概ね近世段階に作られたものが近代にいたるまで改修されながら使用されたものと考えられる。ただし、遡源期については不明である。

本道跡は保坂家屋敷地の西側から通じ、塩山市内の赤尾集落を南北に縦断し、勝沼町とを結ぶ道として存在したものと考えられる。石積みの存在は、道としての重要性を示唆したものといえよう。

宮沢中村遺跡（甲西町）　富士川右岸の標高244mの沖積地に位置する。市川代官所と荊沢宿とを結ぶ市川道沿いの旧宮沢集落内の遺跡である。検出された道跡は法浄寺の参道で両脇に杉を中心とした並木が存在していたことも確認されている。集落の移転が明治33年から42年であり、その後大正末年まで寺があったとされる。このことと出土遺物の内容から江戸時代後期から大正時代にかけての参道であったと捉えることができる。

以上が、発掘調査により明らかになった道跡である。概観してみると、基本的には道の構造としては側溝として２本の溝をもつものが主体であり、西畑遺跡のような石積みを持つものは少ない傾向がある。しかし、山梨県は起伏の激しい地形が数多くあることから、今後石積みなどの地形を制御する遺構が発見されていく可能性もあろう。

また、村の中を通る道（石之坪遺跡・石橋北屋敷遺跡）、村と村を結ぶ道（西畑遺跡）、村と耕地を結ぶ道（丸山東遺跡・新田遺跡）や参道としての道（宮沢中村遺跡）など、発掘された道の意義付けは異なるもの



第10図　上小路集落内の道の変遷（左：明治43年　右：昭和4年）S=1／100,000

の道の規模に大きな差がないことも事実である。主要道と生活道などといった違いが何を指し示すのかを検討する時期にきているのではないだろうか。そもそも、甲斐国外からくる人にとって主要道であっても、近隣で生活している人にとっては普通の生活道であることは十分考えられる。道にヒエラルキーが存在するようになったのはいつからであり、そのヒエラルキーが、その道を使用する側にとっても存在したものであったかの検討も今後の課題といえる。

今回紹介した道跡はいずれも廃絶時期はほぼ確定されているが、創建時期については不明なものがほとんどである。創建時期について、発掘調査資料のみでは限界があり、史資料の検討や聞き取り調査など歴史学や地理学などからのアプローチが当然必要となってくる。

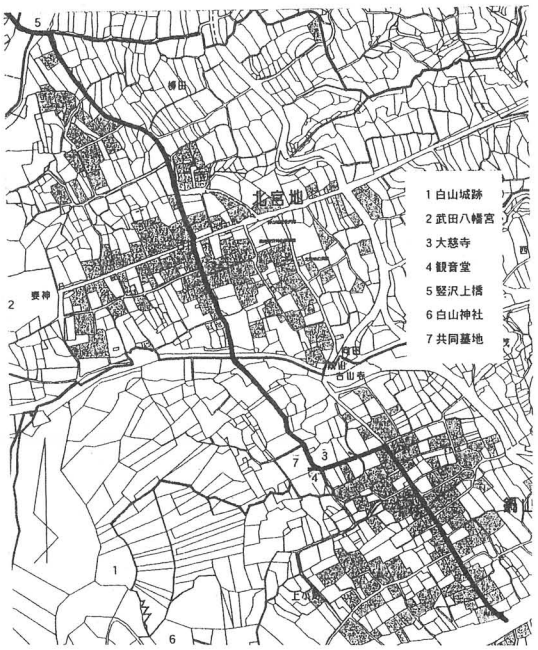
2　発掘以外の古道調査の一手法

発掘調査で道跡の存在は確実に捉えられるが、調査自体は前述したように少ない。しかしながら、すでに検討を加えてきたように、現状の地割や地名などから道の変遷の推察は可能である。古道を発掘以外で捉えていく手法の一つを紹介していく。

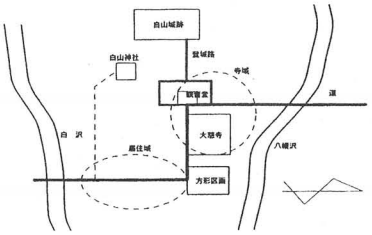
白山城跡を有する鍋山のふもとの字上小路に集落が所在する。集落内を南北に走る道に沿って東西に長い短冊形の地割が残る。上小路の北には字古山寺がある。『甲斐国志』によれば、この地は武川衆の山寺氏が居館を構えたとされている。

第11図は上小路集落周辺の地籍図である。南北に直線的に走る道に沿って短冊形の地割の存在が目に付く。現在、この道は八幡沢まで直線的に延びている。しかし、地籍図を見直すと地割が道により強制的に分断されていることがわかる。このことから、この部分の道が新しく増設されたものと考えられ、増設時期については徳島堰の湾曲部と一致することから近世に遡ると推定した。しかし、今回明治～昭和初期の古地図を検討することで道の増設時期がより新しいことを確認した。

第10図左は明治43年に陸地測量部により作成されたものであるが、これには直線的な道は存在せず、大慈寺に向って直角に曲がることが分かる。同図右は昭和４年に修正された図である。ここでは現在のように南北に抜けるように直線的に道が延びている。このことから、明治43年から昭和４年の間に道が直線になったといえる。



第11図　上小路周辺地籍図（縮尺任意）



第12図　上小路集落景観模式図（縮尺任意）

これにより、明治以前の上小路の集落は第12図のような集落景観と考えられる。この景観がいつからのものであるかは未だ不明確であるが、「古山寺」という山寺氏がもともと居を構えたとされていることを考えれば、中世にまで遡ることも十分考えられる。

地図・地割・地名などの検討からも道及び集落景観の復元は可能である。ただし、地名などは時代の流れと供に変化することは否めず、呼び方と表記が本来的な意味と異なっていることもあり、検討には十分な注意を要することも事実である。

3　まとめ

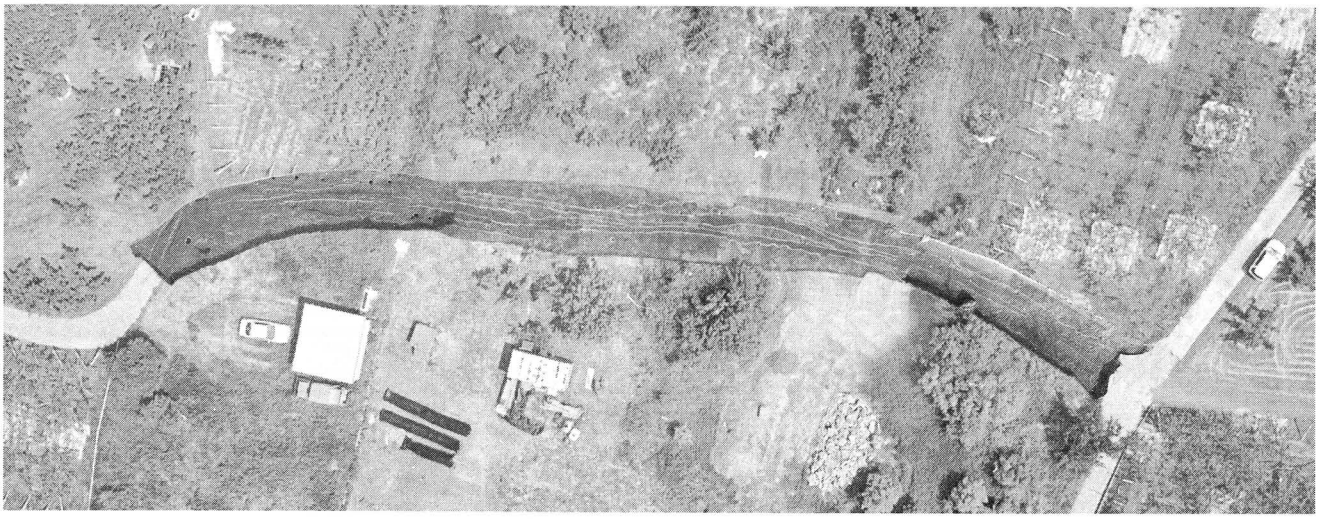
丸山東遺跡の発掘調査で確認された道跡は明治以降のものと考えられるが、溝内に江戸時代中期の陶磁器が出土していることから、道の存在としては遡る可能性もある。道の目的は、耕作地への通路的な役割などが想定できるが、そのことを保障する資料は出土していない。しかし、道が人・物・文化などを運ぶための重要な構造物であることは確かである。調査の中で道の発生起源を捉えることはできなかったものの、この地に道を設けるための重要な意味があったことは確かなことである。それは、現在耕作地内の移動ルートの道が、過去に集落内を走るメインルートとして存在した石之坪遺跡例を見れば明らかなことである。時代背景などにより道の主要用途も当然変化していく、この変化を捉えるためには、考古学・歴史学・地理学・民俗学などによる総合的な調査が必要となってくるであろう。

註

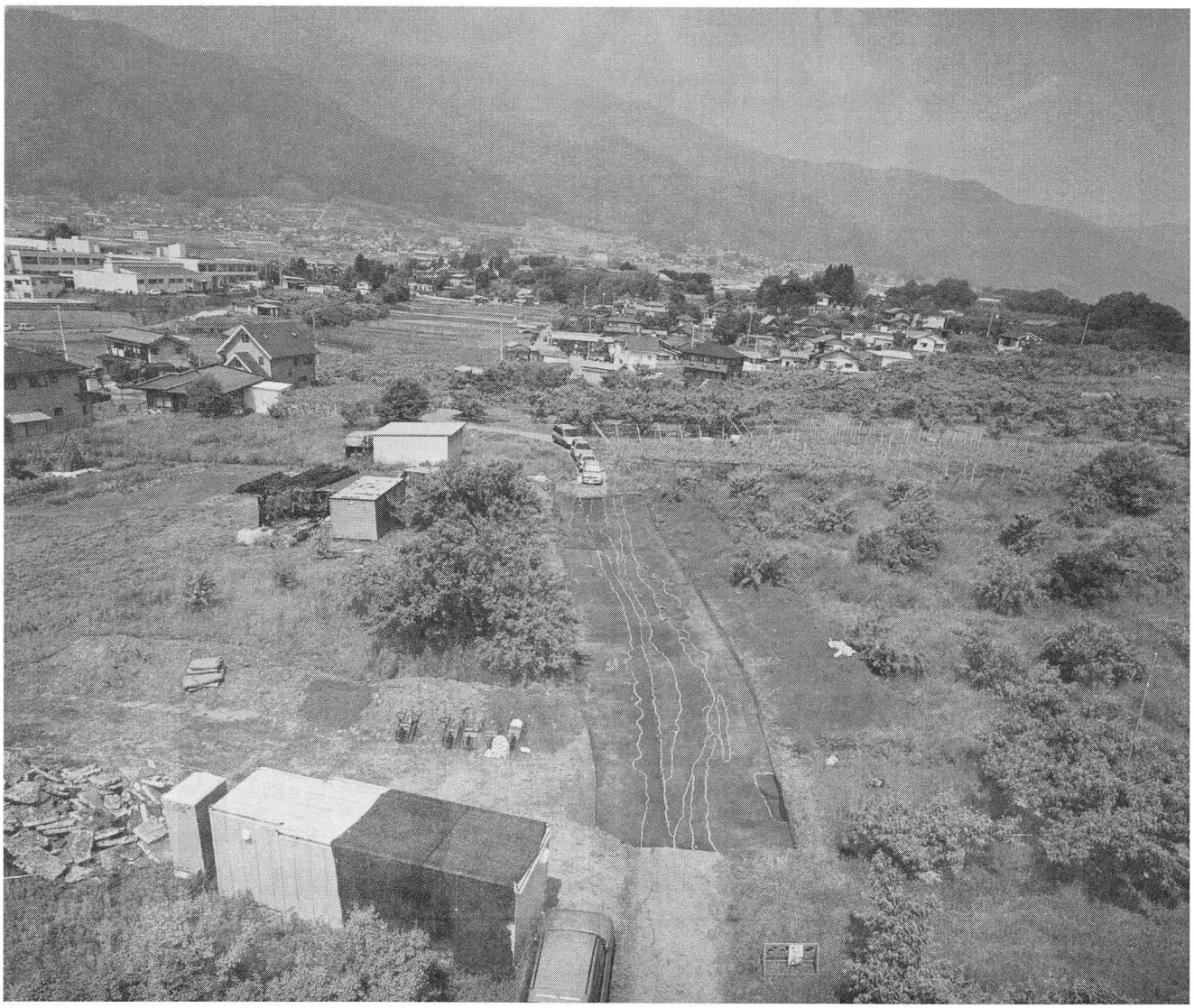
(1) 藤原良章1999「中世の交流と物流」『中世のみちと物流』山川出版社
(2) 峰岸純夫1995「あとがき」『中世東国の物流と都市』山川出版社
(3) 伊藤正彦1986『新田遺跡』韮崎市教育委員会
閏間俊明2001「地名・地籍から探る中世村落から近世村落への移行（予察）」『青山考古』第18号青山考古学会
(4) 閏間俊明2000「中近世集落景観復元への一試論」『八ヶ岳考古平成11年度年報』北巨摩市町村文化財担当者会
(5) 櫛原功一2000『石之坪遺跡（東地区）』韮崎市教育委員会
閏間俊明2001『石之坪遺跡（西地区）』韮崎市教育委員会
(6) 同註(3)
(7) 小林健二2000『石橋北屋敷遺跡』山梨県教育委員会
(8) 新津　健1997『大塚遺跡』山梨県教育委員会
(9) 斉藤秀樹2001『野牛島・大塚遺跡』八田村教育委員会
(10) 石神孝子2002『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県教育委員会
(11) 山本茂樹2001『仲田遺跡』山梨県教育委員会
(12) 秋山圭子2003『次第窪遺跡』韮崎市教育委員会
(13) 新津　健1999『中村宮前遺跡』山梨県教育委員会

遺跡No.	遺跡名	所在地	時代	備考
K28	長塚道上第2遺跡	龍岡町下條東割	平安	
K39	羽根前遺跡	大草町上條東割	縄文	
K40	丸山東遺跡	大草町上條東割字上ノ久保		
K41	宮本遺跡	龍岡町下條南割字宮本	縄文	
K42	長塚道下遺跡	龍岡町下條東割字長塚道下	縄文・弥生・古墳・平安	
K43	長塚道上遺跡	龍岡町下條東割字長塚道上	縄文・近世	
K49	桜木第3遺跡	旭町上條北割字桜木	縄文・平安・中世	
K50	渋田遺跡	旭町上條中割字渋田	縄文・平安・中世・近世	
K51	旭二反田遺跡	旭町上條中割字二反田	縄文・平安	
K52	小曽根遺跡	旭町上條中割字小曽根	縄文・平安	
K55	小曽根第2遺跡	旭町上條中割字小曽根	平安	
K57	宮下遺跡	旭町上條北割字宮下	平安	
K58	大輪寺関連遺跡	旭町上條北割	平安・中世	大輪寺東遺跡を含む
K59	久保屋遺跡	旭町上條北割字久保屋	平安	
K61	久保屋敷遺跡	大草町上條東割字大石	縄文・平安・中世	
K62	築地遺跡	大草町上條東割	縄文・平安・中世	
K63	大門遺跡	大草町下条西割	縄文・古墳・平安	
K64	下馬城遺跡	大草町下条中割宿新居	縄文	
K66	真葛遺跡	龍岡町下條南割西原	縄文	
K67	蔵屋敷遺跡	大草町下条西割	奈良・平安	
T11	御座田遺跡	龍岡町下條南割字御座田	中世	伝十六石
T12	御座田一番堤	龍岡町下條南割字御座田	中世～現代	
T13	御座田二番堤	龍岡町下條南割字御座田	中世～現代	
T14	古宮一番堤	龍岡町下條南割字古宮	中世～現代	
T15	古宮二番堤	龍岡町下條南割字古宮	中世～現代	
T16	阿寺沢一番堤	龍岡町下條南割字阿寺沢	中世～現代	
T17	出水一番堤	龍岡町下條東割字出水	中世～現代	
T18	清水久保一番堤	龍岡町下條東割	中世～現代	
T29	竜岡将棋頭	龍岡町下條南割	中世・近世	国史跡(H15.03.25)

写　真　図　版



調査区全景



調査区を東からのぞむ

報　告　書　抄　録

ふりがな	まる　やま　ひがし　い　せき
書　　名	丸　山　東　遺　跡
副　書　名	大草地区畑総合開発事業に伴う緊急発掘調査報告書
編集者名	閏間俊明
編集機関	韮崎市教育委員会
発行機関	韮崎市教育委員会・峡北地域振興局
住　　所	〒407-8501　山梨県韮崎市水神1-3-1
発行年月日	2003（平成15）年3月24日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	35°41′08″	138°25′26″	屋外・整理 2002年5月 ～ 2003年3月	1,000m²	畑総合開発に伴う道改良工事
まるやまひがしいせき	にらさきしおおくさちょうかみじょうひがしわりあざまるやまひがし	19207	K40					
丸山東遺跡	韮崎市大草町上条東割字丸山東							

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古代か	竪穴状遺構	土師器	
道跡	近世以降	道跡	18世紀代陶磁器	

丸　山　東　遺　跡

発行日　平成15（2003）年3月24日

発　行　韮崎市教育委員会
〒407-8501
山梨県韮崎市水神1－3－1
TEL　0551-22-1111（内224）

印　刷　有限会社 タクト